

振興トピックス

このコーナーでは、主に電源地域の地域活性化に向けたソフト事業の話題を取り上げています。今回は山口県下関市、岡山県真庭市、青森県六ヶ所村、岩手県西和賀町の取り組みを紹介します。



灯台を地域資源として活用

山口県下関市
地図 A

角島は、下関市豊北町の沖に浮かぶ、周囲17kmに約8000人の住民が住む小さな島です。日本海は響灘のコバルトブルーの海と白い砂浜で知られ、中国地方や北九州地方では、キャンプや海水浴の島として知られていました。

平成12年に角島大橋が開通すると、TVコマースィナルや映画のロケ地になったこともあり、一気にその名が知られるようになりました。今では山口県を代表する観光地になっています。

この角島大橋は自然環境に配慮した設計で、コバルトブルーの海に長さ約1.8kmの優美な曲線を描いています。通行無料の離島架橋としては、全国屈指の長さとなっています。

島の西北端には、明治9年に初点灯した角島灯台があります。明治政府の

石造灯台としては日本第3位の高さを誇る



コバルトブルーの海に架かる角島大橋

いこうとするものです。ロマンズの聖地にふさわしい全国各地の灯台を、「恋する灯台」として認定していますが、角島灯台は、もちろんその中の

御雇外国人の設計家R・H・ブランドンの最高傑作で、「日本の灯台50選」のひとつに数えられています。石造灯台として日本第3位の高さになっています。平成5年、周辺は公園として整備され、夕陽の名所でもあります。日本にある参観できる灯台15基のひとつでもあり、最上部から日本海の絶景を望むことができます。灯台の脇には角島灯台記念館があり、灯台長の部屋が復元されています。

灯台といえば、「恋する灯台プロジェクト」というものがあります。これは、一般社団法人日本ロマンチスト協会（本部・長崎県雲仙市愛野町）と日本財団（東京都港区）が共同で実施するプロジェクトです。灯台を

「ふたりの未来を見つめる場所」として定義することで「ロマンズの聖地」へと再価値化して

ひとつに挙げられています。

灯台は、その性格上、岬や離島などの風光明媚なところに立地しています。それを地域資源としてとらえ、積極的に交流人口増加策に取り入れていく動き

薬草の魅力を引き出し 特産品開発、シンポジウム開催へ

岡山県真庭市
地図 B

が全国で加速しています。14年たった今でも現役として点灯している角島灯台ですが、豊北町観光協会では、そうした交流人口拡大策のひとつに活用しています。

岡山県真庭市は、中国山地の山間に位置する自然豊かな地域です。その山里の豊かな自然の恵みのひとつである、薬草に着目した特産品開発が、同市の富原地域の進められています。真庭市の山林や里山には、タンポポ、オオバコ、ハコベ、アザミ、スベリヒユ、イノコズチ（いっとうべ）、ナズナ（ぺんぺん草）、などの四季折々の薬草が豊富で、いずれもミネラルなどの栄養価

が高いことで注目されています。その薬草を使った特産品開発の大きな力となっているのが、富原婦人林研クラブ「やまんばんあば」の皆さんです。薬草の採取はもちろん、その時期しか取れない旬の薬草を使った料理教室の開催、高校生向けの調理実習の実施、薬草を使ったお茶の開

フィールドワークの開催



富原婦人林研クラブによる薬草料理教室



開発された「薬草カレー」



会を組織し、地元の事業者や行政関係者向けの薬草勉強会を開催しているほか、「やまんばんあば」の皆さんと一緒に薬草料理の講習会を行うなど、地域をあげての薬草の特産品化に取り組んでいます。また、同協議会と「やまんばんあば」との共同で、薬草カレーのレトルト商品化に向けて試作が進められています。

この秋には、「第6回全国薬草シンポジウム2017 inまにわ」の開催が決定しました。このシンポジウムでは、全国の薬草に関わる団体や事業者が一堂に会し、「食と健康」、「里山の資源を活かした地域活性化への取り組み」などについて、情報共有・発信が活発に行われます。シンポジウム開催に向けて、今後も薬草を活かした地域活性化の取り組みが進められます。薬草が地域の可能性をどこまで広げられるのか、期待されています。

ふるさと納税の返礼品 リニューアルで特産品PR・販路拡大

青森県六ヶ所村
地図

青森県下北半島の付け根に位置している六ヶ所村。太平洋に面しているため、海産物が豊富で、古くから漁業が営まれてきました。一方、内陸の丘陵地帯では広大な土地と冷涼な気候を活かした根菜類の栽培や酪農が盛んです。しかし、少子高齢化・人口減少の影響により、第一次産業従事者の減少・高齢化が進み、担い手の確保・育成や経営の安定化が喫緊の課題となっていました。

青森県下北半島の付け根に位置している六ヶ所村。太平洋に面しているため、海産物が豊富で、古くから漁業が営まれてきました。一方、内陸の丘陵地帯では広大な土地と冷涼な気候を活かした根菜類の栽培や酪農が盛んです。しかし、少子高齢化・人口減少の影響により、第一次産業従事者の減少・高齢化が進み、担い手の確保・育成や経営の安定化が喫緊の課題となっていました。



リニューアルされたふるさと納税返礼品

そこで、村では、「六ヶ所村まち・ひと・しごと創生総合戦略(平成27

わ)の開催が決定しました。このシンポジウムでは、全国の薬草に関わる団体や事業者が一堂に会し、「食と健康」、「里山の資源を活かした地域活性化への取り組み」などについて、情報共有・発信が活発に行われます。シンポジウム開催に向けて、今後も薬草を活かした地域活性化の取り組みが進められます。薬草が地域の可能性をどこまで広げられるのか、期待されています。

デザインの力で 地域の魅力『ユキノチカラ』をPR

岩手県西和賀町
地図

西和賀町は、秋田県との県境に位置する豪雪地帯。冬の積雪は2mにも達します。そんな地域にとつての厄介者である「雪」を、町の魅力的な地域資源として捉え、広くPRしていこうという西和賀町デザインプロジェクト『ユキノチカラ』が平成27年から始動しています。

町では、以前から自然や風土を活かした特産品が開発されていましたが、特定の製品の生産量が伸びても、それを地域全体のブランドインングにうまく繋げられずにいました。そんな時に、地元信用金庫から、町全体の特産品・地域資源の付加価値をデザインによって高めてPRしてはどうかとの提案を受け、このプロジェクトが動き出しました。

んだ特産物、これらを象徴して生まれたブランドコンセプトが『ユキノチカラ』です。チーム全体でこのコンセプトを共有しつつ、各事業者と担当デザイナーが個別に話し合いを重ねることで、全体の統一感を保ちながらも個々を光らせる商品・デザインが生み出されました。また、この取り組みは地元信用金庫がチームに加わることで、金融面でも事業者をサポートできる仕組みとなっています。

とが狙いです。新たに返礼品に加えられたのは、村で水揚げされた新鮮な海産物、特産の根菜類を中心とした農産物加工品、村が誇るブランド牛『小川原湖牛』などです。

海産物からは、ウニ、イカ、タコ、アワビ、ヒラメなどが新たに返礼品に加わりました。なかでも甘くて濃厚な味わいが特徴のウニは、漁の解禁が年2〜3回であるため入手が難しく、希少なウニです。農産物加工品からは、きめ細かい舌ざわりが特徴の長芋を使用した和菓子や漬物、カロテン含有の多いニンジンジュース、やわらかな酸味とほのかな甘みの特徴のブルーベリーを使用したスイーツが、新たに返礼品に加わりました。

このプロジェクトに、参加した各事業者や関係者も手ごたえを感じています。地域の魅力をPRする取り組みは、実は自分たちの地域の魅力を再発見することにも繋がっているようです。

『小川原湖牛』は、焼き肉用、

すき焼き用肉などが相性抜群の「特製たれ」とのセットで新たに返礼品に加りました。その上品な旨みの特徴で、地元でも愛されています。

品を返礼品に加えることも視野に、検討が進められています。なお、平成29年度には、寄附者が気軽に制度を活用できるように、ふるさと納税サイトから直接申し込みができる環境が整備されます。ふるさと納税を活用した特産品の知名度向上、販路拡大への効果が期待されます。



『ユキノチカラ』商品
ホームページ URL <http://www.yukino-chikara.com/>